

II 都市計画の目標

1. 都市の将来像

本区域は、平成 17 年現在、人口約 1 万 4 千人で、県全体人口（約 136 万人）の約 1%、北部都市圏人口（約 12 万 8 千人）の約 1 割が居住する美しい海と豊かな緑に囲まれた都市です。近年、国営沖縄記念公園海洋博覧会地区を中心とする海洋性リゾート拠点として注目される一方で、赤土流出汚染等自然環境への負荷が増大していることから、やんばるの地域特性をいかした自然環境と共生する都市づくりとともに、隣接する名護市や今帰仁村と適切に連携を深め、役割や機能を分担した都市づくりを推進することが重要と考えられます。

このことを踏まえ、おおむね 20 年後は次のような都市の実現を目指します。

①やんばるの豊かな自然を守り育む都市

本区域では、桜の名所である八重岳や本部富士、山里一帯の円錐カルスト地形等、内陸部の亜熱帯の森や海浜部の美しいサンゴ礁など、豊かな自然が受け継がれてきており、自然環境と共生する都市が形成されています。



▲八重岳の桜



▲瀬底島から本部町を望む

②山、川、海の水循環を軸とした持続的
発展を遂げる都市

先人が築き上げた歴史とともに、豊かな自然環境と共生した土地利用を継承してきた本区域においては、水循環を軸とした美しく豊かな自然環境の保全、地産地消、環境負荷の軽減に継続的に取り組み、持続的発展が可能な循環型の社会基盤が確立されつつあります。

▼やんばる型村落と土地利用（名護市喜瀬） 名護市史



▲満名川と河口・本部港（渡久地地区）

③国際観光リゾート拠点として成長・充実する都市

本区域は、国営沖縄記念公園海洋博覧会地区やウェルネス（いやし）をテーマとした観光レクリエーション機能等、多くのリゾート環境の整備・強化が図られた観光・リゾート都市として、着実に成長・発展しています。さらに、様々な産業と有機的に連携しつつ、豊かな自然や地元の食材、伝統文化、地域の営み等、地域との交流が可能な体験・滞在型の観光拠点として定着し、魅力的ないやしの空間を創出しています。

▼沖縄美ら海水族館



▼国営沖縄記念公園海洋博覧会地区



▼マリニピアザ沖縄



④川や港をいかし、伝統と共存する都市

満名川や本部港（渡久地地区）を中心とした市街地では、周辺の観光レクリエーション機能と連携し、観光客と地元の人々との交流する場や川と港と町を一体にした中心街として、活気があふれています。また、郊外部においては、ミカン等の産地である伊豆味一帯の農地利用等とともに、フクギ屋敷林に囲まれた備瀬の集落をはじめ、本区域の文化的資産である小路や広場、集落を取り巻く森や御嶽、井戸等を含めた集落景観など、気候風土に根ざした多くの伝統的集落環境が保全されています。



▲備瀬集落のフクギ林

2. 人口及び産業の規模

(1) 人口

本区域の将来におけるおおむねの人口を次のとおり想定します。 (平成17年時点)

区 分		年 次		
		平成17年	平成27年	平成37年
都市計画区域		14.4千人	14.4千人	14.4千人

資料：平成17年国勢調査

(2) 産業

本区域の将来における産業の規模を次のとおり想定します。

区 分		年 次		
		平成17年	平成27年	平成37年
生産規模	工業出荷額	59億円	73億円	90億円
	卸小売業販売額	112億円	127億円	156億円
就業構造	第一次産業	0.8千人(12.9%)	0.5千人(8.9%)	0.4千人(7.5%)
	第二次産業	1.2千人(19.8%)	1.3千人(21.6%)	1.3千人(21.6%)
	第三次産業	4.1千人(67.3%)	4.2千人(69.5%)	4.3千人(71.0%)
	計	6.0千人(100%)	6.1千人(100%)	6.0千人(100%)

資料：沖縄県の工業、沖縄県の商業

3. 現状と課題

●広域都市計画区域への再編

かつてやんばるの中心として栄えた今帰仁間切から近世になって分離した本区域は、隣接する名護市や今帰仁村と歴史的にも地理的にも深いつながりを持つことから、当該市村との都市計画区域再編や拡大を視野に入れて、今後の都市づくりの基本方向を共有していくことが重要です。

●自然共生型土地利用の再考

豊かな自然環境と共生した土地利用を基本として集落が形成されてきた本区域は、その優れた自然環境と一定の均衡が保たれていましたが、近年、社会基盤の整備等に伴う赤土流出汚染等により、自然環境への負荷が増大しています。

そのため、自然の地形と環境に配慮した社会基盤の整備とともに、廃棄物の減量化、生ごみの堆肥化、リサイクル等を進めて循環型社会を構築するなど、先人が培った自然との共生の知恵をいかし、環境負荷の小さな都市を実現していくことが求められます。

●市街地の再生や伝統的集落の保全

本区域では、満名川の河口に形成された渡久地や谷茶の集落を中心に、幹線道路の整備に伴って、周辺の農地や埋立地等にまちが形成されてきました。

本部港（渡久地地区）については、臨港地区が指定され、ターミナルの整備が完了したことから、こうした動向を踏まえながら、まちの再生に取り組む必要があります。また、港を中心とした周辺市街地においては、用途の混在もみられ、適正な用途地域の指定が重要な課題となります。

一方、海辺の備瀬や新里等の集落や内陸部の屋取（琉球の士族が18世紀頃から地方へ移り住んで形成された集落）等には、フクギや石垣で囲われた伝統的な集落が点在しており、景観法の活用等によって、これらの文化的資産を保全しつつ良好な生活環境の形成を図る必要があります。

●観光・リゾート産業を支える自然環境の保全・修復

本区域は、恵まれた海浜景観資源や国営沖縄記念公園海洋博覧会地区をはじめ、近隣に世界遺産に登録された今帰仁城跡等の観光拠点を持つことから、リゾートホテルやゴルフ場等の観光レクリエーション施設が集積しています。

今後、国際的観光・リゾート地の形成を目指し、観光の通年化と滞在の長期化を実現するため、エコツーリズムやグリーンツーリズム、ブルーツーリズム等、豊かなやんばるの自然環境を活用し、ウェルネス（いやし）をテーマとした観光の充実や島々を含めた広域の観光・交通網の形成、旧上本部飛行場跡地における長期滞在型宿泊施設あるいは、農林水産体験・滞在型交流施設（保養研修タウン機能）等、リゾート諸施設の整備を進めるとともに、赤土流出防止対策等の環境保全対策や採石場等の景観対策等による観光資源の維持・向上に努める必要があります。

●中核都市・名護との連携

本区域では、かつて好況だったカツオ漁の衰退等、農林水産業や工業の粗生産額・出荷額が減少し、サービス業、卸売・小売業等の第3次産業の割合が年々伸びてはいますが、若年層の流出や高齢化の進行等、地域活力の低下が懸念されており、人と産業の定住条件の整備が急務と考えられます。

一方、隣接する名護市では、道路整備に伴い近隣町村を商圈とした大型店舗の立地が相次ぎ、さらに教育、文化、消費、医療等の各種機能や就業機会の充実が図られています。

今後は、やんばるの中核都市として多様な機能を有する名護市と連携を深めながら、本部港（渡久地地区）の再生活用等、個性的な都市機能の充実に特化し、適切な役割分担を進める必要があります。

4. 都市づくりについて

1) 基本理念

本区域においては、ユニバーサルデザインの考えを積極的に取り入れたすべての人が自らの意思で自由に行動し、社会参加のできる「すべての人にやさしいまちづくり」を行政と住民が一体となって進めるとともに、豊かな自然環境に抱かれ、その歴史的・文化的価値を高めた持続的発展が可能な安らぎの都市の実現を図ります。

2) 広域的な位置付け

本部半島と島々からなるこの一帯には、国際的にも貴重といわれる亜熱帯の豊かな自然と共生し、山、川、低地、海という水循環を軸とした伝統的な土地利用が行われてきており、自然環境とともにこのような歴史や文化も次世代に確実に受け継ぐ必要があります。

このようなことから、歴史、文化等の関連が深い名護市や今帰仁村と将来像を共有し、機能を分担するため、次のような広域的な位置付けを設定します。

自然交響都市圏・やんばる（やんばるの自然にとけ込むまち）

3) 基本方針

**海・山・半島の特性と歴史・文化をいかし、
人と人との交流を大切にしたいやしの里づくり**

①北部都市圏で連携した都市づくり

本部半島とやんばるの脊梁山地、そして島々からなる本区域と隣接する名護市や今帰仁村は、歴史的にも地理的にも関連の深い一体的な地域であり、相互連携を深め、交流を促進しながら、豊かな自然や伝統文化と融和した個性ある都市づくりを進めます。

②自然共生型土地利用を基盤とした循環型の都市づくり

自然環境と共生しながら永い年月をかけて成熟した本区域においては、山・川・低地・海の一体となった伝統的な土地利用を継承して、自然環境の保全や赤土流出防止対策等の環境対策などを図り、環境負荷の小さな循環型都市の構築を推進します。

③地域の歴史をつなぐ集落や市街地の再整備

既存集落等においては、土地に刻まれた歴史やたたずまいをいかしながら、より安全で快適な居住環境の整備を図ります。

④中核都市名護との連携強化

本区域は、行政、経済、教育、文化、情報通信、金融、交通結節機能等、やんばるの中核都市として多様な都市機能をもつ名護市と連携を強化しながら、地域の特性をいかした都市機能の充実を図ります。

⑤国際的な観光都市づくり

国際的観光リゾート地を形成するため、国営沖縄記念公園海洋博覧会地区の拠点機能の充実、自然的観光資源の保全・創出、ウェルネス（いやし）をテーマにした観光レクリエーション機能や保養滞在研修機能などの充実を図るとともに、世界遺産の今帰仁城跡等歴史文化拠点と有機的に連結した体験・滞在型観光の定着に資する観光・リゾート空間の創出に努めます。

4) 将来都市構造

本区域を含む周辺市町村は、脊梁山地と本部半島、名護湾、島々、そしてサンゴ礁の海等、独特な地理的特性を有しており、その地理的特性をいかした広域的な都市構造を次のとおり想定します。

本部港（渡久地地区）周辺の中心集落は、港と満名川とを連携した都市づくりを進め、港を中心に各種拠点のネットワーク化による活気ある拠点の形成を図るとともに、集落を取り巻く山里円錐カルスト周辺や八重岳周辺をはじめ、今帰仁城跡や羽地内海、多野岳、羽地ダムから東村、大宜味村、国頭村の連続した貴重なやんばるの自然等の周辺景観と調和したいやし空間を形成します。

そして、国営沖縄記念公園海洋博覧会地区周辺の観光・リゾート機能の充実及び西海岸沿いに良好な沿道景観の形成等、観光軸を強化するとともに、高次都市機能が集積した名護市の中心市街地や新たな産業機能の集積が期待される東海岸の久辺三区（辺野古・豊原・久志）、隣接する大井川河口の今帰仁村仲宗根周辺等など、周辺地域との広域交流・広域連携を促進し、適切に機能を分担して、北部都市圏の独自性を高めていきます。